

2004-2005 東京漢方入門講座

第4回 『見えない檻』 (通算24回)

2005.1.20

今回のタイトルは『見えない檻』と題しました。

「檻」とは猛獣などが逃げ出さないように設けるもの。つまり空間を隔てるために用意されるものですね。しかし、檻に入れられるのは猛獣だけではありません。我々人間の間でも「世界を隔てる」という意味でいつも檻をつくり内と外を区別しようとしています。はっきりと意識して檻に入ったり、檻の外へ出たり。そんな時もあります。しかし時には無意識のうちに「見えない檻」に囲まれることもあるかもしれない…。

既成概念という言葉があります。「何々には何々」「こういう時にはこう」と、決まっていることとして物事を扱う場合に必要となるものです。我々はこうして諸事に対する対応を学ぶのだし、それが元となって次のステップに進むわけですから大事なことであります。しかし、常にそれが正しいかという点意外にその保証はなかつたりもします。

医学においても既成概念というものは存在します。すでに明らかになった事柄について「〇〇なら△△」と解説され、多くの場合それは正しい。しかし、何度も繰り返し唱えられているうちに初期には肝心であったはずのポイントが逸脱してしまったり、あるいは結果として誤った解釈になってしまうこともあります。漢方においても同じこと、普段の診療において重要視していないことが実は重要なポイントであったり、何度も聞かされているうちに大切な要点を忘れてしまったり…。そんなこともきつとあるはずですよ。

西洋医学においては配慮されないことであっても東洋医学にとっては重要な鑑別点、そんな例をとって本日はお話をしてみます。

また、番外編では「漢方薬の価値」についてとりあげてみます。漢方治療の選択を決定する理由となる重要なポイント、その価値がどこにあるのかじっくりとお考えになられてみてください。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

茯苓 沢瀉 蒼朮(白朮)
猪苓 半夏 生姜(乾姜)

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、そしてどのように使い分けるのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

五苓散：桂枝、茯苓、蒼朮、沢瀉、猪苓

小半夏湯：半夏、生姜

小半夏湯加茯苓湯：半夏、生姜、茯苓

半夏厚朴湯：半夏、生姜、茯苓、厚朴、紫蘇葉

二陳湯：半夏、生姜、茯苓、陳皮、甘草

六君子湯：半夏、生姜、茯苓、蒼朮、人參、陳皮、大棗、甘草

半夏瀉心湯：半夏、乾姜、黃連、黃芩、人參、大棗、甘草

小柴胡湯：半夏、生姜、柴胡、黃芩、人參、大棗、甘草

大柴胡湯：半夏、生姜、柴胡、黃芩、大棗、芍藥、枳實、大黃

ポイント

■「口渇」の意味と有無

今回からご参加の先生方へ

東洋医学は徹底した経験の注視によって成立した医学であり、よってそこから編み出された漢方薬もやはり人の反応や症状によって鑑別されるべきものであるはずです。

西洋医学においても重要な身体所見というものは多々存在します。それは西洋医学的治療を行う際には大切なものであって、決して軽視することは許されません。しかし、だからと言ってそれがそのまま東洋医学にとって重要な所見であるかということ、その限りではありません。逆に言えば、西洋医学的に重要ではない所見は東洋医学にとっても重要ではない、などという保証はどこにもないということにもなるのです。なぜならこれらの両医学はその成立の起源を異にしているからです。

漢方薬が東洋医学のモノサシで選ばれるべきものであることについては繰り返しお話ししてきました。その東洋医学のモノサシとは数千年にわたって「日常の出来事」を注意深く観察することで形作られてきたものです。当然のことですが、上記と同じ理由から西洋医学のそれとは違っていて当たり前なのです。

東洋医学において、診断し治療へと結びつけるための手法は四診（シシン）という言葉で言い表されます。

その四診とは以下をさします。

- **望診**：患者を望む、すなわち自分の目で見ること
- **聞診**：患者から発せられる音や臭いから状態を推測すること
- **問診**：いわゆる問診
- **切診**：接することで情報を得ること

この望聞問切（ポウ・ブン・モン・セツ）はどれも東洋医学において診断のためには不可欠なもの。しかし、ただそれだけではなく「診察の優先順位」をもしめしています。「望診をせずに切診をするなかれ」ということです。ついつい検査に頼りがちになってしまう現代医療の反省点はさながら「十分な問診なしに切診（検査）することなかれ」の戒めそのものようにも思えます。もちろん、ヒトはそのような傾向になりやすいからこのようなことが言われているわけであって、つまりそれはなにも現代人ばかりが陥る失敗というわけでもないのでしょう。

本日の題名は『見えない檻』です。檻には様々なものがあります。「西洋医学の考え方という檻に入っていることに気づかず漢方治療を理解しようとする」、これもひとつの檻ですね。

どうぞ、東洋医学の視点でものを考えることから「見えない檻」の存在をご実感ください。